世界における「学生参画」の多義性

2017年5月27日（土）10:00～12:00

日本高等教育学会第20回大会（東北大学）

田中正弘（筑波大学）

目次

- はじめに
- 先行研究
- 学生参画の定義
- まとめ

はじめに

- 「学生参画」（student engagement）という用語を，多くの国の高等教育関連文書で目にするようになった（Millard et al. 2013）。
- しかし，この用語の意味は実に多様である。
  - 学生参画といっても，具体的に誰が（who），どこで（where），何を（what），いつ（when），どんな目的で（why），どのように（how）行うべきなのかが，各国で大きく異なるためである。
- そこで，先行研究を参考としつつ，本発表で学生参画の定義づけを試みたい。

先行研究

クーの研究

- 学生参画に関する著名な研究の一つは，「全国学生調査」（NSSE）を開発した，クー（George Kuh）の研究成果である（Kuh 2001）。
  - この研究は，1960年以降にアメリカで蓄積されてきた，カレッジ・インパクト研究の集大成といえる。
  - 彼が強い影響を受けた先行研究は主に三つある。
    1. サンフォード（Nevitt Sanford）による，学習環境の研究
    2. アスティン（Alexander Astin）の「学生発達論」（Student Development Theory）
    3. チッカリング（Arthur Chickering）とガムソン（Zelda Gamson）の七つの行動規範

クーの定義

- クー（2009: 683）の定義によると，
  - 学生参画とは，①大学の期待する学習成果に経験上つながると思われる活動に学生が費やす時間や努力のことである。また②学生がそれらの活動に参加するように大学が仕向けることでもある。

    注：丸数字は発表者が付加した。
- ここで興味深いことは，①の量と質を担保するのは大学の責務だと，②で明示していることである。
  - その一方で，学生には義務や責任を求めていない。

学生参画実施の責務

- 学生参画の実施は，
  - 学生に求めるべき責務なのだろうか，
  - それとも，大学に求めるべき責務なのだろうか，
  - あるいは，双方に求めるべき責務なのだろうか。
- そこで，学生参画の責務の所在を，学生を弟子，顧客，パートナーのいずれと見なすかによって，図示化（次頁）できると提案したい。

学生参画の責務の所在

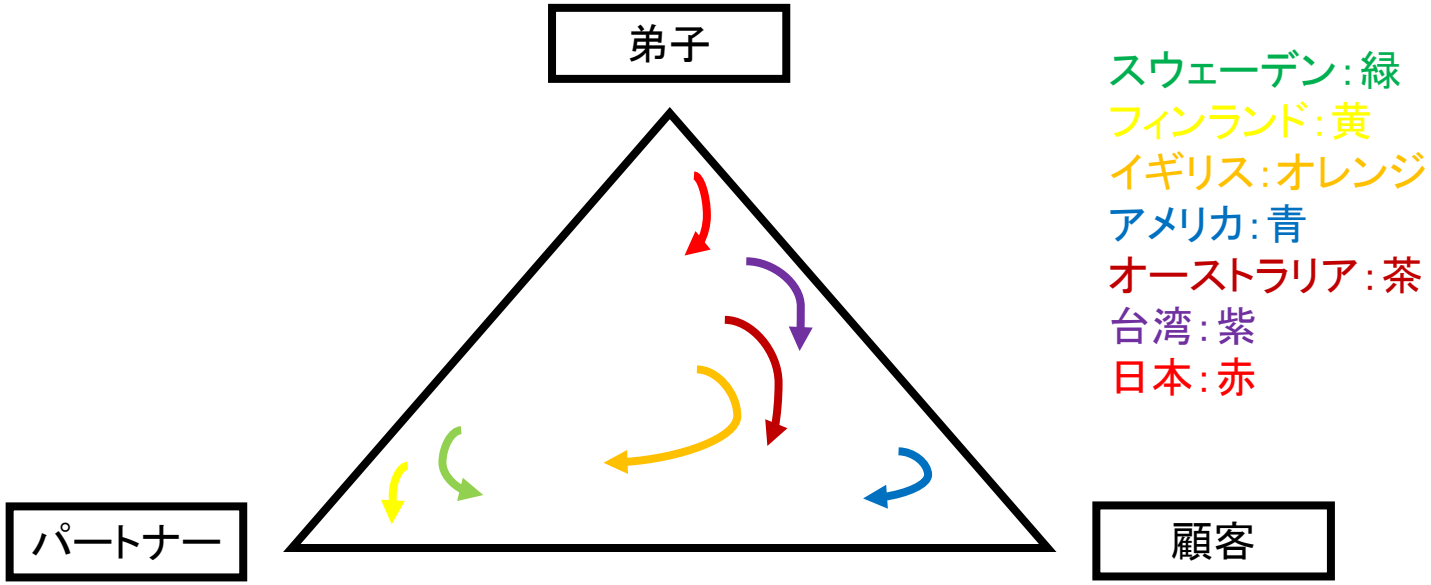

図1：学生の立場と学生参画の責任の所在

注：矢印は分析対象国の「暫定的な位置づけ」（各国の分析を経て，再検証する）を表す。

弟子と見なす場合

- 学生を弟子（研究者の卵）と見なす考え方は，フンボルト大学誕生以来，多くの国の大学で支持されてきた。
  - フンボルト理念を継承した大学では，教員は自らの研究成果を自由に教える権利（教授の自由）を保証されるため，教員はカリキュラムの全体像に関心を持つ必要はなく，自らの教育方法に疑問を持つことすらなく，まして，学生が教育方法の改善を働きかけることなど失礼なことだとされた。
- このような状況下において，学生参画を推進する責務が大学にあるという認識は広まりにくい。また，教育改善に参加する権限が学生に与えられることも考えにくい。

顧客と見なす場合

- 学生を顧客と見なす考え方は，学費導入・高騰を通して，高等教育の商業化が進んだ国で提唱されるようになった（Maringe 2011）
  - 商業化が進んだ国では，学生に満足感を与える教育を提供できない大学は，学生の流失によって，競争の中で淘汰されることを意味する。
- 従って，学生の要望や期待を知り抜くために学生参画を遂行することは，大学の（生き残りをかけた）責務となる。
  - ただし，情報を提供しなければならない義務は，学生にはない。

パートナーと見なす場合

- 学生をパートナーと見なす考え方は，大学は教員，職員，学生の三者で構成されるという三者自治が確立している，北欧諸国などで早くから定着していた。
  - 現在は，ボローニャ・プロセスに学生を取り込むようになるなど，特に欧州の国々を中心に，政策的後ろ盾を得られる考え方となった（Levy, et al. 2011）。
- パートナーに位置づけられた学生は，大学の意思決定に関わる権利を与えられることになるが，同時に，教育の改善・評価・支援への協力が義務づけられるのに加えて，その結果に対する連帯責任を負うことも意味する。

注：ただし，学生は成長過程にある大人として扱われるべきであり，信頼を持って任せられる業務は，ある程度，限定されると思われる。

参画する学生の目的

- 学生参画の責任の所在だけでなく，学生がいかなる目的で参画しているかを論じることは，学生参画の理解に欠かせないと思われる。
- そこで，参画の目的を，ヒーリーほか（Healey, et.al. 2010: 22）の３分類に従い，考察してみたい。
  - ミクロ：学生個人や他の学生の学修活動への参画
  - メゾ：質保証・向上プロセスへの参画
  - マクロ：戦略策定（ガバナンス）への参画

ミクロ・レベルの目的

- ミクロ・レベルの学生参画の目的は，学生個人の学習成果を高めることである。
  - というのも，コーツ（Coates 2005: 26）が指摘するように，学習成果は「教育的に意味のある活動に各自がどのように取り組むかで決まる」ためである。
  - ミクロ・レベルの学生参画にピア・サポートを加えれば，他者の学習成果を高めることも主な目的となり得る。

メゾ・レベルの目的

- メゾ・レベルの学生参画の目的は，学生の声を教育評価・改善に活かすことである。
  - 学生の声を集める方法は，直接的（学生と教職員が直に意見を交換する）なものと，間接的（質問紙調査などで意見を集約する）なものがある。
    - 一例として，間接的な方法といえるNSSEの結果は，学生の現状を把握するだけでなく，教育改善の証拠に活用できる（Pascarella, et. al., 2010: 21）。
    - 直接的な方法には，外部評価への参加と内部評価への参加の二つがある。

マクロ･レベルの目的

- マクロ･レベルの学生参画の目的は，大学運営（ガバナンス）に学生の利益を反映させることである。
  - ただし，学生と大学の利害が対立する場合，お互いの妥協点を見出すために，両者の対話が欠かせない。
    - 学生や大学だけでなく，社会の利益も考慮すべきだろう。
  - さらに，学生が大学運営に関わることは，大学の意思決定のプロセスを透明なものにすると思われる（Lizzio and Wilson 2009）。

学生参画の定義

トローラーの定義

- トローラー（Trowler 2010: 2）は，クーの定義を参考に，独自の定義を以下のように示している。
  - 学生参画は，学生と大学の両者が費やす時間・努力・資材の相互作用に関係する。その目的とは，学生の学習経験を最も効果的にし，学生の学習成果・成長・パフォーマンスや大学の名声をあげることである。
- トローラーは，学生と大学が協働して何かを行うことは，学生のためだけでなく，大学のためでもあると主張している。

ブライソンの定義

- ブライソン（Bryson 2014: 17）は，クーやトローラーのように参画の目的を明示せずに，定義している。
  - 学生参画とは概ね，個々の学生の目標，抱負，価値，信念などの観点から，彼らが高等教育に何かをもたらすことである。そして，その何かが彼らの経験によってどのように形成・伝達されるかでもある。
- ブライソンは，活動の過程だけでなく，その結果何が生じたかという成果を含め，学生参画と呼んでいる。
  - 教育的に意味のある活動に参加する重要性を強調しているので，クーやトローラーの定義と大きな差異はないといえる。

ハーパーとクェイの定義

- ハーパーとクェイ（Harper and Quaye: 2009: 2）は定義をより単純化し，下記のように提示している。
  - 学生参画は，測定可能な成果につながる，教育的に効果のある課内・課外活動への参加として，単純に特徴付けられる
- 測定可能という文言から学生調査のことを指摘していると思われるものの，過程だけでなく，その成果も重要視している点で，他の定義と類似点が見られる。

独自の定義

- 先行研究の定義は，学生参画が学生と大学の双方にとって有益な活動となることを期待している。
- そこで，本発表では，ミクロ・メゾ・マクロ，それぞれのレベルの目的達成を強調しつつ，定義を試みたい。
  - 学生参画とは，①学生個人および同僚の学習成果を最大化する目的で，または，②大学教育の質を保証・向上させる目的で，あるいは，③大学の運営に学生・大学・社会の利益を反映させる目的で，学生が自らの労力や情報を大学に提供することである。

今後の研究計画

- 本発表で提示した定義が，異なる文化の国々に当てはまるかをテストするために，スウェーデン，フィンランド，イギリス，アメリカ，オーストラリア，台湾，日本における学生参画の現状と課題を，各国の専門家に分析してもらっている。
- その成果は，英語・日本語の両言語で出版する計画がある。

ご清聴ありがとうございました。

参考文献

- Astin, A. (1984) “Student Involvement: A Developmental Theory for Higher Education”, *Journal of College Student Development*, 40(5), 518-529.
- Bryson, C. (2014) “Clarifying the Concept of Student Engagement”, Bryson, C. (Ed.) *Understanding and Developing Student Engagement*, Abingdon: Routledge, 1-22.
- Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) “Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", *AAHE Bulletin*, March 1987, 3-7.
- Coates, H. (2006) *Student Engagement in Campus-based and Online Education: University Connections*, London: Routledge.
- Harper, S. R. and Quaye, S. J. (2009) “Beyond Sameness, with Engagement and Outcomes for All: An Introduction”, Harper, S. R. and Quaye, S. J. (Eds.) *Student Engagement in Higher Education: Theoretical Perspectives and Practical Approaches for Diverse Populations*, Abingdon: Routledge, 1-15.
- Healey, M., Mason-O’Connor, K. and Broadfoot, P., (2010) “Reflections on Engaging Student in the Process and Product of Strategy Development for Learning, Teaching, and Assessment: An institutional case study,” *International Journal for Academic Development*, 15(1), 19-32.
- Kuh, G. (2001) “Assessing What Really Matters to Student Learning Inside The National Survey of Student Engagement”, *Change: The Magazine of Higher Learning*, 33(3), 10-17.
- Kuh, G. (2009) “What Student Affairs Professionals Need to Know about Student Engagement”, *Journal of College Student Development*, 50(6), 683–706.
- Levy, P., Little, S. and Whelan, N. (2011) “Perspectives on Staff-Student Partnership in Learning, Research and Educational Enhancement”, Little, S. (Ed.), *Staff-Student Partnerships in Higher Education*, London: Continuum, 1-15.
- Lizzio, A. and Wilson, K. (2009) “Student Participation in University Governance: The Role Conceptions and Sense of Efficacy of Student Representatives on Departmental Committees”, *Studies in Higher Education*, 34(1), 69-84.
- Maringe, F. (2011) “The Student as Consumer: Affordances and Constraints in a Transforming Higher Education Environment”, Molesworth, M, Scullion, R. and Nixon, E. (Eds.), *The Marketisation of Higher Education and the Student as Consumer*, Oxford: Routledge, 142-154.
- Millard, L., Bartholomew, P., Brand, S. and Nygaard, C. (2013) “Why Student Engagement Matters”, Nygaard, C., Brand, S., Bartholomew, P. and Millard, L. (Eds.) *Student Engagement: Identity, Motivation and Community*, Faringdon: Libri, 1-15.
- Pascarella, E. T., Seifert, T. A. And Blaich, C. (2010) “How Effective are the NSSE Benchmarks in Predicting Important Educational Outcomes?”, *Change: The Magazine of Higher Learning*, 42(1), 16-22.
- Sanford, N. (Ed.) (1962) *The American College: A Psychological and Social Interpretation of Higher Learning*, New York: Wiley.
- Trowler, V. (2010) *Student Engagement Literature Review*, York: Higher Education Academy, (https://www.heacademy.ac.uk/resources/detail/evidencenet/Student_engagement_literature_review).